

討ち入りの現場



本所（両国橋東側の地域）は、もともと湿地帯で、明暦3（1657）年の大火後に本格的な開発が始まった。武蔵と下総を結ぶ両国橋がかけられたのを皮切りに、湿地が埋め立てられ、川や堀がめぐらせられ、碁盤目に道路が敷かれた。そうしてできた土地には、江戸市中から旗本や御家人が移り住み、縦川・横川沿いには町人の町もできた。それから50年ほど後、吉良上野介が幕府の命で本所に移転してきた。元禄15（1702）年12月14日夜半、その吉良邸に、大石内蔵助率いる赤穂浪士47人が討ち入った。浪士たちは、2時間に及ぶ激闘の末に上野介の首級をあげると、主君の眠る泉岳寺へと引き揚げていった。